

令和4年度（2022年度）幼稚園評価報告書

園名	宝塚市立 丸橋 幼稚園	園長名	北 聡子
----	-------------	-----	------

1 幼稚園教育目標

豊かな心を持ち、たくましく生きる幼児の育成

2 重点目標

- 自分の思いを伸び伸びと表現する幼児
- 相手の話をよく聞き、思いを分かろうとする幼児
- 最後までやり遂げる幼児
- 互いに認め合い、協力して生活する幼児

3 幼稚園自己評価結果（A：優れている B：良い C：おおむね良好 D：要改善）

領域	評価の観点及び評価項目	達成状況	学校の取組状況・改善の方策	4 評価項目ごとの学校関係者評価
園運営	開かれた幼稚園づくり	A	<p>新型コロナウイルス感染症対策として園庭での参観を行ったり、時間を短くし内容を工夫したりするなど、状況に応じて柔軟に実施するよう努めた。</p> <p>今後も、導入されたコドモンのドキュメンテーションやホームページを活用しながら、幼児の様子を伝えたり、保護者や地域のニーズや意見を取り入れたりするなど模索しながら取り組んでいく。</p> <p>コロナ禍ではあったが、評議員と連絡を取り合い、幼稚園の状況を伝えたり、今後の園経営についてご助言をいただいたりしながら意見交換を行うことができた。</p>	<p>導入されたコドモンの活用によって、保護者からの連絡等が負担なくできるようになり、喜んでいただいていることは評価できる。また、ドキュメンテーションを配信することで、幼児の様子を伝えることができるので、今後も継続して取り組んでいただきたい。</p>
	子育て支援の推進	A	<p>新型コロナウイルス感染症対策を行いながら、未就園児の親子同士で遊ぶ機会を設け、地域の子育て支援をする。</p> <p>定期的に子育て相談を実施し、保護者支援をする。</p>	<p>未就園児教室のくまさんクラブへの参加対象を1～3歳としたことで、参加人数が増えたことは成果である。地域の未就園児親子にとって遊ぶ場所があることは、年齢が近い親子と関わるができる大切な機会なので、継続を望む。</p> <p>また、子育て相談のあり方として、気軽に相談できる雰囲気づくりや身近に感じられる手紙での啓発などを考えてはどうかと思う。</p>
	危機管理体制の整備	A	<p>幼稚園の実態に照らし合わせ、危機管理マニュアルを見直し、計画を実施した。多様な想定を考え、幼児も職員も真剣に訓練に取り組むことができた。</p> <p>訓練をしていても慌ててしまうことがあることを踏まえて、日頃から状況に応じて素早く判断し、行動できるよう努める。</p>	<p>今年度の園児数や職員数などの実態に合わせて、随時マニュアルを見直し計画立てていることは評価できる。</p> <p>今後も自分たちでできることを考え、消防署等に参加を依頼しながら訓練を継続することが大切である。</p>

	教職員の 資質向上	教職員間で学び合う機会をもつと共に、保育点検を行い、環境構成や援助について学ぶ。	B	自分の言葉で保育を語ることを大切にしながら教師の援助や環境構成について学び合うことができた。 今後も、園内研究会などで学んだことを生かし、教職員が協力しながら幼児を育てていくことを大切にしていく。	日々忙しいとは思われるが、担任の学びたいという意欲を受け止め、研修を計画し、実施していることは評価できる。
教育課程	幼児期に ふさわしい 生活の展開	個々の幼児のよさを生かしながら、遊びを通して年齢にふさわしい学びが得られる保育内容を工夫する。 幼児自身が気付いたり、学んだりできる魅力的な環境構成や援助を工夫する。	A	コロナ禍においても実際に見たり感じたりする経験ができるよう保育内容を工夫してきた。できるだけ異年齢で遊ぶ機会を取り入れ、幼児同士が自然に関わる姿を大切にしてきた。 また、教師間の打ち合わせを密に行い、幼児の発達を考慮しながら、育てたいことを明らかにし、保育内容の工夫に努めた。	4歳児、5歳児と一緒に遊ぶ・弁当を食べる・運動遊びをするなど、コロナ禍がやや落ち着いた時期にいろいろな経験ができるようになってよかったと思う。幼児の興味・関心に合わせて計画している異年齢保育を、丸橋幼稚園の特色として今後も継続が望まれる。
	道徳性の 芽生えの 育成	自然や動植物との触れ合いを通して、生命の大切さに気付かせる。 友達との関わりから、自分の思いを伝えたり、相手を理解したりする力を育てる。	B	園内のウサギや虫などの世話を通して命の大切さを感じながら、親しみをもって関わる事ができた。年間栽培計画を作成し、時期に応じた栽培活動を継続する。 トラブルがあったときは、思いをじっくりと聞き、自分で気持ちを切り替えようとする姿を受け止め、励ますことを継続していく。	自然に興味をもてるよう飼育栽培に取り組み、実際にさなぎが蝶になった様子を見る経験をすることができた。生き物を大事に育てたという気持ちをもつことができたのではないかな。 友達との関わりがあるからこそトラブルを経験することができるので、相手の思いを知ったり、自分の考えを伝えたりする機会を大切にしたい。
課題教育	校種間の 連携	感染状況を考慮しながら幼稚園の取組を伝えたり、関わりが考えられたりするときには、臨機応変に対応し、交流の機会をもつ。	A	感染症の状況を把握しながらプレ1年生事業や、保育所・小学校との交流を継続して行うことができた。また、幼保小の教師間で研修会を実施し、幼児の育ちや課題などについて語り合う機会をもつことができた。	感染状況が落ち着いた状況をうまく生かし、タイムリーに交流を実施することができた。また、幼保小の教師間で、交流の必要性を再確認し合ったり、研修会を実施できたりしたことは評価できる。
	人権教育	人権教育年間計画を立案すると共に、学級の課題を随時取り上げて保育を行う。 教師自身の人権意識を磨き、人権尊重の姿勢で保育にあたる。	A	人権参観の機会をつくり、幼児の姿や取組などを見ていただくことができた。 今後も一人一人が常に人権意識をもちながら保育に携わり、職員研修を積み重ねていくよう心掛ける。	日々の保育が人権教育であり、幼児教育の基本である。保護者対象の人権参観を実施できたことで、啓発につながり、取組を伝えることができた。今後も継続が望まれる。
	特別支援 教育	幼児の発達に即した指導や援助を工夫する。	B	個別の支援計画を見直しながら、具体的な手立てを考え、教師間の連携を図りながら援助することに努めた。また、保護者とは、送迎時や電話などで幼児の育ちや課題を伝え、連携を取るよう心掛けた。	個々の特性に合わせて、個別の支援計画を作成し、手立てを考えながら対応している様子が伺える。 今後も子どもや保護者の方への支援をお願いしたい。

5 学校評価の実施方法についての学校関係者評価

行事ごとに保護者アンケートを行い、意見を聞く機会をもっている。それを基に評価を行っているので、実施方法については適切である。

6 総合的な学校関係者評価

コロナ禍における保育への取組や行事のあり方を職員間で検討し合い、子どもたちの育ちに必要なことを考えながら取り組んでいた。